

重兵衛さんの一家

寺田寅彦

青空文庫

明治十四年自分が四歳の冬、父が名古屋鎮台から熊本鎮台へ転任したときに、母と祖母と次姉と自分と四人で郷里へ歸つて小津おづの家に落ちつき、父だけが単身で熊本へ赴任して行つた。そうして明治十八年に東京の士官学校附に榮転するまでただの一度も歸省しなかつたらしい。交通の便利な今のわれわれにはちよつと想像し難いほどの長い留守を明けたものであるが、若い時から半分以上は他国を奔走してばかりいた父には五年くらいの留守は何でもないことであり、留守を守る祖母や母も当り前の事と思つていたものらしい。当時の土佐と熊本とでは、心理的には今の日本とカリフォルニアくらいのへだたりがあつたのである。郷里へ引上げると間もなく次姉は市から一里くらい西のA村に嫁入りをしたので、あとは全く静かな淋しい家庭であつた。その以前から長姉の片付いていたB家が三軒置いた隣りにあつて、そこには自分より一つ年上の甥が居たから、自分の幼時の多くの記憶はこの姉の家と自宅との間の往復につながつている。それと、もう一つ、宅うちの門脇の長屋に住んでいた重兵衛さんの一家との交渉が自分の仮想的自叙伝中におけるかなり重要な位置を占めているようである。

重兵衛さんの家は維新前にはちやんとした店をもつた商人であつたらしいが、自分の近

づきになった頃はいわゆる「仲持」なかもちすなわち、今の土地家屋売買周旋業と云つたような商売で、口と足とさえ働かしておれば自然に懷中に金の這入つて来る種類の職業であつたらしい。五十近いでつぶり肥つた赤ら顔でいつも脂ぎつて光つていたが、今考えてみるとなかなか頭の善さそうな眼付きをしていた。夏の暑い盛りだと下帯一つの丸裸で晩酌の膳の前にあぐらをかいて、しぶうちわ波団扇で蚊を追いながら実にうまそうに杯さかずきをなめては子供等を相手にして色々の話をするのが楽しみであつたらしい。松魚かつおの刺身のつまに生のんにくをかりかり齧かじつているのを見て驚歎した自分は、自宅や親類の人達がどうしてんにくを喰わないかと思つて母に聞いたら、あれを食うと便所が臭くなるからいけないと云うことであつた。重兵衛さんの家では差支えのない事が自分達の家ではいけないのは、どういう訳だかと不思議に思われた。そう云う種類の事がいろいろあつた。その中の一つがこのんにくの問題であつたのである。そのせいでもあるか、重兵衛さんが真白な歯の間へ真白なにんにくの一片をくわえて、かりかりと噛み切る光景が鮮明なクローズアップとなつて想い出される。幼時の記憶には実に些末なような事柄が非常に強く印象に残っていることがある。そういうことは意識的にはつまらぬことのようにでも、意識の水準以下で、どんな思いも寄らない重大な意義をもち、どんな重大な影響を生涯に及ぼしているかもしれない

い、しかしそれを分析して明確な解説を与えることは容易ではないのである。自分のこの大蒜にんにくの場合について考えてみると、あるいはこの些細な副食物が、一方では自分等の家庭と、他方では重兵衛さんで代表された一つの階級の家庭との間のあらゆる物質的また精神的な差別の象徴として印象されたものではなかったかとも思われるのである。

重兵衛さんの晩酌の膳を取巻いて、その巧妙なお伽とぎばなし噺ばなしを傾聴する聴衆の中には時々幼い自分も交じっていた。重兵衛さんの長男は自分等よりはだいぶ年長で、いつもよく勉強けんぎんをしていたのでその仲間にはいらなかったが、次男の亀さんとその妹の丑尾うしおさんとが定連じょうれんのお客であった。重兵衛さんの細君さいくんは喘息ぜんそくやみでいつも顔色の悪い、小さな弱々しいお婆さんであったが、これはいつも傍で酌をしたり蚊を追ったりしながら、この人にはおそらく可笑おかしくも何ともない話を子供と一緒に聴きながら一緒に笑っているのであった。表の河沿いの道路に面した格子窓には風鈴ふうりんが吊されて夜風に涼しい音を立てていたように思う。この平凡な団欒だんらんの光景が焼付いたように自分の頭に沁み込んでいるのはどういう訳かと考えてみる。父の長い留守の間に祖母と母と三人きりで割合に広い屋敷の中でつつましい生活は子供心にもかなり淋しいものであったに相違ないので、この広くて淋しい家と、重兵衛さんの狭くて賑やかな家との対照が幼い頭に何かしら深い印象を

刻んだのではないかと想像される。その頃のわが家を想い出してみると、暗いランプに照らされた煤すすけた台所で寒竹かんちくの皮を剥むいている寒そうな母の姿や、茶の間で糸車を廻わしている白髪こむぎの祖母の袖無羽織の姿が浮び、そうして井戸端から高らかに響いて来る身に沁むような蟋蟀こむぎの声を聞く想いがあるのである。寢床で母からよく聞かされた阿波あわの鳴門なるとの十郎兵衛の娘の哀話も忘れ難いものの一つであった。

重兵衛さんのお伽噺のレペルトワルはそう沢山にはなかったようである。北山の法ほう経きよ堂どうに現れる怪火けちびの話とか、荒倉山あらくらやまの狸が三つ目入道に化けたのを武士が退治した話とか、「しばてん」（木の葉天狗）と相撲を取る話。「えんこう」（河童かっぱ）を釣る話とかいう種類のものが多かった。一例として「えんこう」の話をとると、夕涼みに江えノ口くちがわ川の橋の欄干に腰をかけているとこの怪物が水中から手を延ばして肛門を抜きに来る。そこで腰に鉄鍋を当てて待構えていて、腰に触る怪物の手首をつかまえてぎゅうぎゅう捻ねじ上げたが、いくら捻じつても捻じつても際限なく捻じられるのであった。その時刻にそこから十町も下流の河口を船で通りかかった人が、何かしら水面でぼちやぼちや音がしていると、思つてよく見ると、一匹の「えんこう」が、しきりにぐるぐる廻転運動をしているのであった。つまり「えんこう」の手は自由自在に伸長されるもので、こんなにまで長くなり得

るものだという事が、この「事実」で証明されるといのであった。

いろいろな奇抜な方法で雀や鴉からすを捕る話も面白かった。一例を挙げると、庭へ一面に柿の葉を並べておいて、その上に焼酎しょうちゆうに浸した米粒をのせておく。雀が来てそれを食うと間もなく酔を発して好い気持になり、やがてその柿の葉を有合わせの蒲団にしてぐつすり寝込んでしまう。秋の日がかんかん照りつけるので柿の葉が乾燥してじりじりと巻き上がるのでいつの間にかそつくりと雀を包んで動けないように縛つてしまう。その頃を見計らつて箒ほうきで掃き集めると米粒に一俵くらいは容易に捕れるといのである。また、鴉を捕る法としてはこんなのがある。牛の脊中へ赤い紙片を貼付け、尻尾しっぽに摺粉木すりこぎを一本縛り付けて野良のらへ出しておく。鴉が下りて来て牛の脊中の赤い紙を牛肉と思つてつつかと、牛は蠅もでも追う気でびしやりと尻尾ではたく、すると摺粉木の一撃で鴉が脆もろくも撲殺されるというのである。

これらの話は、柳家やなぎや小さんの落語のごとく、クライスラーのクロイツェルソナタのごとく実に何度となく同じ聴衆の前に繰返されて、そうしてその度ごとに新しくその聴衆を喜ばしたものである。繰返せば繰返すにつれてますますその面白味の深さを加えたものである。この点では論語や聖書も同じことであるのみならず、こういう郷土的色彩の濃厚な

怪談やおどけ話の奥の方にはわれらとは切つても切れない祖先の生活や思想で彩られた背景がはつきりと眺められるのであるから、こういう話を繰返し聞かされている間にわれわれの五体の幾億万の細胞の中に潜んでいる祖先の魂が一つ一つ次第次第に呼び覚まされて来るのであった。中学時代になつてからやつとイソップやグリムやアンデルセンにめぐり合つて日本の外に他の世界があること、そこにはわれらとはよほどちがった生活と思想のあることを教えられたのであった。今の子供はコスモポリタンなお伽噺の洪水の波に押流されていくようなものである。もしも今の少青年に民族的な精神が欠乏しているとすればその原因の一つとしては西洋お伽噺の食傷も数えられなければならないかもしれない。

重兵衛さんは性的な問題を取扱つた話はほとんどしなかつたようである。姉の家で普請をしていた時に、田舎から呼寄せられて離屋はなれに宿泊していた大工の妻めくさんから色々な話を聞かされたがこれにはずいぶん露骨な性的描写が入り交いりまじていたが、重兵衛さんの場合には、聴衆の大部分が自分の子供であつたためにそういう材料はことさらに用心して避けたものと思われる。

とにかく重兵衛さんの晩酌さかなの肴さかなに聞かしてくれた色々の怪談や笑話の中には、学校教育の中には全く含まれていない要素を含んでいた。そうしてこの要素を自分の柔らかい頭に

植えつけてくれた重兵衛さんに、やはり相当の感謝を捧げなければならぬように思う。重兵衛さんは自分の心にフアンタジの翼を授け、自分の現実世界の可能性の牢獄を爆破してくれた人であった。

重兵衛さんの次男で自分よりは一ツ二ツ年上の亀さんから、実に色々のことを教わった。彼はたしかに一種の天才であつたらしい。何をさせても器用であつて、彼の作つた紙鳶は風の弱い時でも実によく揚りそうして強風にも安定であつた。一緒に公園の茂みの中にわなをかけに行つても彼のかけた係蹄にはきつとつぐみや鶺鴒が引掛かるが、自分にはちつともかからなかつた。鰻釣りや小海老釣りでも同様であつた。亀さんは鳥や魚の世界の秘密をすつかり心得ているように見えた。学校ではわりに成績のよかつた自分が、学校ではいつもびりに近かつた亀さんを尊敬しない訳には行かなかつた。学校で習うことは、誰でも習いさえすれば覚えることであり、一とわたりは言葉で云い現わすことの出来るよくな理窟の筋道の通つたことばかりであつたが、亀さんの鳥や魚の世界に関する知識は全く直観的なものであつて、とうてい教わることの出来ない種類のものではあつた。亀さんは眼をつむつていてもその心の眼には森の奥における鳥の行動や水底の魚の往来が手に取るように見えすくかと思われるのであつた。そういう種類の、学校では教わることの出来ない

い知識が存在するということ、そういう知識が貴重なものだということ、この亀さんに教わったのである。

母や祖母は自分が亀さんと遊ぶことをあまり喜ばなかつたらしい。亀さんは実際「行儀の悪い」子供であつたらうし、また随分いたずらなものでもあつたらしい。草原の草を縛り合わせて通りかかった人を躓かせたり、田圃道に小さな陥^{おとしあな}窞^{ふみこ}を作つて人を踏込ませたり、夏の闇の夜に路上の牛糞^{ぎゆうふん}の上に螢を載せておいたり、道端に芋の葉をかぶせた燈^{あかり}火を置いて臆病者を怖がらせたりと云つたような芸術にも長じていた。月夜に往来へ財布を落しておいて小蔭にかくれて見ている、通行人があたりを見廻わしてそれを拾おうとするときに、そつと手許の糸を手繰ると財布がひとりですると動き出すというような深刻な教育法をも実行した事があつたようである。こういう巧智はしかしことごとくが亀さんの独創によるものではなくて、大部分は重兵衛さんの晩酌時の講話の時に授かつたものであつた。重兵衛さんの寺子屋時代の悪戯^{いたずら}にはずいぶん過劇なものもあつたようである。

こういう、学校では教わらない悪戯教育も、今から考えてみると自分には色々な意味で有益であり貴重なものであつたように思われる。人生行路に横たわる幾多の陥窞^{おの}に対する警戒の芽生えを植付けてくれたような気がする。他人の軽微な苦痛を己が享樂の小杯に盛

ろうとする不思議な心理がいかなる善良な人々の心の奥にも潜在することを教えてくれたようである。それから、冒険というものに対する本能的な興味の最初の小さな焰に点火してくれたとも考えられる。

この頃活動写真で色々な空中戦の壮烈な光景を見せられる。空の勇士、選りぬきのエースが手馴れの爆撃機を駆って敵地に向かうときの心持には、どこかしら、亀さんが八かましやの隠居の秘蔵の柿を掠奪に出かけたときの心持の中のある部分に似たものがないか。こんな他愛のないことを考えることもある。それはとにかく、亀さんが鳥人になつたらおそらく人並以上の離れ業を演じ得る名操縦士になつたことであろう。

亀さんの妹の丑尾さんとはあまり一緒に遊ぶことがなかつたようである。その頃は男の子と女の子が遊んでいると、他の遊び仲間から「おとことおなごとおにやんべ、やんがておややができやんしょ」と云つて囃し立てられるのであつた。しかしただ一度ある小春日のわが家の門前で起つた些細な出来事だけがはつきり印象に残っている。多分七、八歳くらいの自分と五、六歳くらいの丑尾さんが門前のたたきの斜面で日向ぼっこをしていた。自分が門柱にもたれてぼんやり前の小川を眺めていたとき丑尾さんが自分の正面に立ってしばらく自分の顔を見詰めていたようであつたが、真に突然に、その可愛い両腕を左右に

ぱつと拵げたと思うといきなり飛びつくようにして、しつかりと自分を抱擁した、そのとき自分がそのままにじつとしていたのか、それとも急いで押しつけたか、それはちつとも記憶していない。ただ覚えているのは、丑尾さんが着古した袖無そでなしのちゃんちゃんを着て、頭ちっを小ぢやなおちごに結ゆっていたことと、それから、その日の小春の日影が実にうららかに暖かくのどかであったということだけである。この丑尾さんは、たしか自分の家がその後一時東京に移っていたその二年の間に病死してしまったので、十歳にも満たない本当に果敢はかない存在ではあった。しかし自分の幼年時代の追憶の夢の舞台に登場する唯一の異性のヒロインはこのやや不器量で可哀そうな丑尾さんであったのである。

重兵衛さんの長男楠次郎さんから自分は英語の手ほどきを教わった。これについては前に書いたことがあるから略する。楠さんは独学で法律を勉強して、後に裁判所の書記に採用された。弟妹とちがつて風采もよくてハイカラでまたそれだけにおしゃれでもあった。自宅では勉強が出来ないので円えんぎょうじばし行寺橋たもとの袂たもとにあった老人夫婦の家の静かな座敷を借りて下宿していた。夏のある日の午後、いつものようにそこへ英語を教わりに行った時に、自分には初めての珍しい飲料を飲まされた。コップに一杯の砂糖水をつくって、その上に小さな罍に入った茶褐色の薬液の一滴を垂らすと、それがぱつと拵がって水は乳色に変わ

った。飲んでみると名状の出来ぬ芳烈な香気が鼻と咽喉のどを通じて全身に漲みなぎるのであった。何というものかと聞くと、レモン油ゆというものだと教えられた。今のレモン・エッセンスであったのである。明治十七、八年頃の片田舎の裁判所の書記生にしては実に驚くべきハイカラであったに相違ないのである。ゲーテのライネケフックスの訳本を読んで聞かせてくれたり、十歳未満の自分にミルの経済論、ルソーの民約論を教授してくれるという予告だけでもしてくれた楠さんは、たしかにその時代の新人であり、少なくとも自分にとつては、来るべき「約束の国」の先触れをする天使の役をつとめてくれたように思われる。

自分の一家がいったん東京へ移ってから再び郷里に帰った頃は重兵衛さんの家は宅うちのすぐ東隣の邸に移っていた。まもなく重兵衛さんは亡くなってそのうちに息子の楠さんは細君を迎えて新家庭をつくった。新婚後まもないことであつたと思う。ある日宅の女中が近所の小母おぼさん達二、三人と垣根から隣を透すきみ見しながら、何かひそひそ話しては忍び笑いに笑いこけているので、自分も好奇心に駆られてちよつと覗いてみると、隣の裏庭には椅子を持出してそれに楠さんが腰をかけている。その傍に立った丸鬚まるまげの新婦が甲斐かひ甲斐がひしくたすきが襷たすきが掛けをして新郎のために鬚ひげを剃ひつてやっている光景がちらと眼前に展開した。透見の女性達の眼には、その光景が、何かひどく悪い事でもしている現場を見届けでもしたよう

に、とにかく笑うべく賤しむべきこととして取扱われていたらしい。しかし当時の自分にはその光景がひどく美しく長閑のどかなものに思われ、そうして女中等のそういう態度に対して少なからず不満を懐いだいたようであった。

その後重兵衛さんの一家がどうなったか。これに関する自分の記憶は実に綺麗ぬくに拭ぬかれたように消えてしまっている。ただ、楠さんの細君が亡くなり、次にひどく酒飲みになった楠さんも若死をしたこと、亀さんが医師の家に書生をしていて、後に東京へ出て来てどこかの医者のの代診をしているという噂を聞いたように思うだけである。

幼時を追想する時には必ず想い出す重兵衛さんの一族の人々が、自分の内部生活に及ぼした影響と云ったようなことは、近頃までついぞ一度も考えてみたことはなかったのである。この頃になつて、自分に親しかった、そうして自分の生涯に決定的な影響を及ぼしたと考えられるような旧師や旧友がだんだんに亡くなって行く、その追憶の余勢は自然に昔へ昔へと遡さかのぼつて幼時の環境の中から馴染なじみの顔を物色するようになる。そういう想い出の国の人々は、別にえらい人でもなんでもなかったであろうが、そういう人々から全く無意識の間に受けた教育の効果は、よかれ悪しかれ実に予想外に重大なものであるということが、やっとこの頃になつて少しばかり分りかけて来たような気がするのである。

このなんらの山もない重兵衛さん一家の平凡な追憶記は、子供をもった現代の世間の親達にも、もしや何かの参考になるかもしれないと思うのである。

（昭和八年一月『婦人公論』）

（『蒸発皿』への追記）この記事が縁となつて、重兵衛さんの次男の亀さんからの消息に接することが出来た。今日では立派な医師となつて大連^{だいらん}の方に住んでいるのである。家族一同の写真を送ってくれたが、四十年前の亀さんの面影が今日でもそっくりそのままに残っているのであった。

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第四巻」岩波書店

1985（昭和60）年11月5日第3刷発行

初出：「婦人公論 第十八年第一号」

1933（昭和8）年1月1日発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

重兵衛さんの一家

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>